

てん まちようこうさてん いっほんみなみ きゅうとうかいどうすじ ひがし
伝馬町 交差点一本南の旧東海道筋を東に二百メー
トルほど入ると、右側にコンクリートで木橋を模した裁断
橋跡と、鉄筋コンクリート造りの姥堂があります。

いま よそお あたら
今ではすっかり装いも新しくなっていますが、かつては

ひがし しょうじんがわ なが か
この東に精進川が流れ、そこに架かっていた裁断橋が宮
宿の入口でした。姥堂は裁断橋の西詰南側にあり、

なんぼくちようじだい えんぶん えんぶくじ ほうじゆん
南北朝時代の延文三（一三五八）年、円福寺の法順という
僧が熱田神宮の涙ヶ池の辺から移したとされています。

ほんぞん じようろく ※身長一丈六尺座高二四〇cm やさ かおだ じもと
本尊の丈六の「おんばこさん」は優しい顔立ちで、地元で

なが した さんず かわ ししゃ いふく は
は長く親しまれてきましたが、三途の川で死者の衣服を剥
ぎ取る奪衣婆なのだそうです。そんな訳で、姥堂辺りでは

むかし しょうじんがわ さんずがわ よ
昔、精進川は三途川、おんばこ川と呼ばれていました。

てんしょう あつた せんしようき
天正十八（一五九〇）年二月十八日、熱田さんに戦勝祈

がん いた さいだんばし ひがし たびだ むしやしゅうだん
願をして、傷んだ裁断橋から東へ旅立つ武者集団があり
ました。豊臣秀吉に齒向かう北条氏を倒すため、小田原に

しゅつじん ほりおよしはる いっこう なか べいごしよむら げん
出陣する堀尾吉晴の一行です。この中に、御供所村（現
大口町）から来た初陣の、十八歳になる若者がいました。

よしはる おじほりおまさやす いっしきんすけ※吉晴の息子説あり きんすけ やまい
吉晴の伯父堀尾方泰の一子金助です。 金助は、病で

しゅつじん ちちまさやす みようだい

出陣できない父方泰の名代でした。その金助に、父の

きゆうち ゆうじんよこいげんすけ ずいこう

旧知の友人横井源助が随行していました。源助は海東郡

とだむらさいしようじ じゆうしよく じゆんせい そう

戸田村西照寺の住職で淳誓という僧でしたが、金助

げんぞく

のために還俗したのです。金助の母は別れを惜しみ、後ろ髪

おも さいだんばし むすこ おく だ

ひかれる思いで裁断橋から息子を送り出しました。

おだわらせ ながび しゅつじん ご げつちか

小田原攻めは長引き、あの出陣から五か月近くたった

しちがついつか ほうじよう こうふく ひでよしぐん しょうり

七月五日、ついに北条は降伏し、秀吉軍は勝利しました。

がいせん よしはるいつこう なか きんすけ すがた

凱旋する吉晴一行。しかし、その中に金助の姿はあり

いくさ お ちよくぜん ひでよしぐん

ませんでした。戦が終わる直前の六月十八日に、秀吉軍の

じんちゆう びようし※戦死説もある ちちまさやす きんすけ しご

陣中で病死していたのです。また、父方泰も金助の死後、

ごごしよむら な きんすけ いひん も かえ

御供所村で亡くなっていました。金助の遺品を持ち帰った

げんすけ ひとりのこ はは じんちゆう きんすけ ようす くわ かた

源助は、一人残された母に、陣中の金助の様子を詳しく語

き い

って聞かせたと言います。

きんすけ はは さんず かわ よ しょうじんがわ わた たびだ

金助の母は、三途の川と呼ばれた精進川を渡って旅立

むすこ にど もど かな じようぶつ

った息子が二度と戻らないことを悲しみ、ひたすら成仏を

いの しゅつじん ひ むすこ わか お おも

祈りました。そして、出陣の日に息子と別れを惜しんだ思

で さいだんばし いた おも だ きんすけくよう

い出の裁断橋が傷んでいたことを思い出し、金助供養のた

めに私財を投じて橋を架けなおすことを決意します。そして、
橋は翌年完成。再び出家した淳誓こと源助が、渡初め
の日に群集に仏法を讃嘆して、橋の由来を説きました。

やがて時は移り、徳川の天下となつて、裁断橋の架かる
東海道は幕府によって整備されていきます。宿駅に指定

された宮宿も、後世、街道一の宿場町として賑わう片鱗
を見せ始めます。念仏三昧の生活を送り、齢七十を超え

た金助の母は、息子との別れや裁断橋の架け替えを昨日の
ことのように覚えていましたが、裁断橋を渡る人には、い

つしか普請の由来は忘れられ、橋も傷んできていました。そ
こで、元和七（一六二二）年、金助の三十三回忌にあたり、

裁断橋をもう一度架けなおすことを決意します。また、老い
先短い自分の死後、後々の世の人にも橋の由来が伝わる

よう、母の思いを擬宝珠に刻むことにしました。結局、元
和八（一六二二）年の橋の完成前に金助の母は亡くなりました

たが、堀尾方泰の家督を継いでいた紀州出身の安藤
類右衛門が、完成した橋で供養と渡初式を行ったのです。

その後、裁断橋は何度も架け替えられ、精進川は

しんほりかわ つけかえかいしゅう たいしょう

新堀川への付替改修で、大正十五（一九二六）年に埋めら

れました。「おんばこさん」も熱田空襲で姥堂と一緒に焼け

てしまいました。昔の面影は失われましたが、裁断橋と

姥堂は新しい姿で今も残り、明治三十七年製の擬宝珠

が、名古屋市博物館に保管されています。平成五年に整備さ

れた姥堂には、復元された「おんばこさん」が安置され、裁断

橋では複製の擬宝珠を見ることが出来ます。

擬宝珠に刻まれた銘文は、日本女性の三大名文の一つと

言われるもので、こんな風に書かれています。

「天正十八年二月十八日に 小田原への御陣

堀尾金助と申す 十八になりたる子を立たせてより

また二目とも見ざる 悲しさのあまりに

今 この橋を架けるなり

母の身には 落涙ともなり

即身成仏し給え 逸岩世俊と

後の世の又のちまで

此の書き付けを見る人は 念仏申し給えや

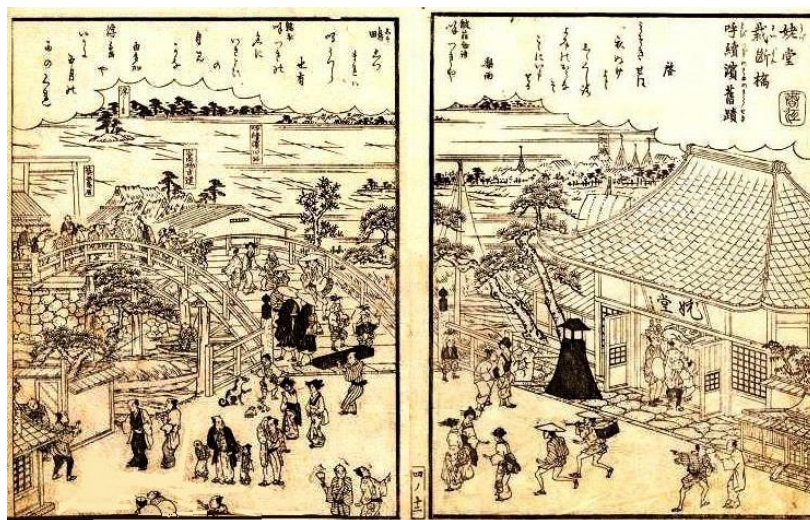
三十三年の供養なり」 ※読みやすいよう漢字仮名交じり文に改めました

【参考にした文献等】

- 『新編 熱田裁断橋物語』市橋鐸／総修 社本鋭郎／編集 姥堂裁断橋保存会・堀尾遺跡顕彰会 一九八一年
- 『史跡 あつた』熱田研究よもぎの会 名古屋泰文堂 一九七二年
- 『熱田 歴史散歩』日下英之著 風媒社 一九九九年
- 『熱田区の歴史散歩』ブックシヨップ「マイタウン」 一九八四年
- 『日本の橋』保田與重郎／著『昭和文学全集②⑧』所収 少学館 一九八九年
- 『橋と塔』浜田青陵（故浜田耕作）／著 大雅堂 一九四三年
- 『尾張名所図会（上巻）』愛知県郷土資料刊行会 一九一九年（一九七三年再復刻版）
- 『尾張徇行記』愛知郡 熱田神領の条 海東郡 戸田村の条
- 『名古屋市 熱田区誌』熱田区制五十周年記念誌編集部会／編集 熱田区制五十周年記念事業実行委員会 一九八七年
- 『熱田区の歴史』三渡俊一郎／著 愛知県郷土資料刊行会 二〇〇六年
- 『紙のかぶと 郷土に輝く人々①』愛知県小中学校長会／編集 愛知県教育振興会 一九六四年



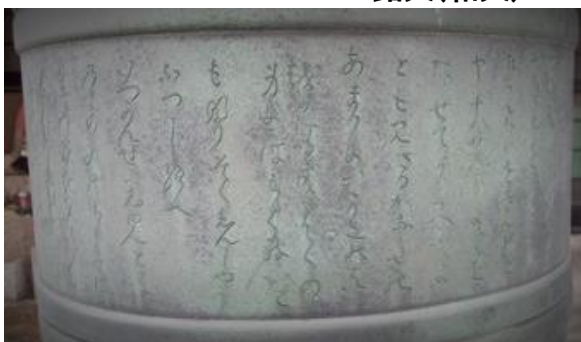
おんばこさん



『尾張名所圖會 前編 四』1880年 熱田図書館蔵



擬宝珠
銘文(和文)



(大口町)堀尾跡公園 五条川の裁断橋と姥堂 堀尾邸跡 金助と母の像



現在の裁断橋と姥堂(2階)